

臨床看護実習で学ぶ養護教諭に必要な能力

学習程度に着目して

Required Abilities as a Yougo Teacher Obtained at Practice Clinical Nursing

Focusing on Degrees of Understanding

満田 タツ江 今村 朋代
Tatsue MITSUDA Tomoyo IMAMURA

キーワード：臨床看護実習，養護教諭，能力，学習の程度

I. はじめに

「教育職員免許法施行規則」第9条によると短期大学（二種免許状）における養護教諭養成課程の臨床実習は、養護に関する専門教育科目としての看護学（10単位）の中に「臨床実習及び救急処置を含む」とされている。10単位は養護に関する科目の中で大きな割合を占めているが、その中の臨床実習の単位数や施設、実習内容等に関する基準はなく、養成機関に委ねられているため、様々な形態で行われている。^{1) 2)}

K短期大学（以下K短大と称す）でも、臨床看護実習を一単位（5日間）実施しているが、実習期間が少ない上に施設や診療科の規定がないため、常に養護教諭としての能力の育成に必要な実習になっているかという課題を抱えてきた。養護教諭に必要な能力とは保健体育審議会答申（1997年）では「心の健康問題と身体症状に関する知識理解」「心の健康問題と身体症状の観察の仕方や受け止め方等についての確かな判断力と対応力」「健康に関する現代的課題の解決のための個人または集団の児童生徒の情報収集能力」「健康課題をとらえる力量」「健康課題解決のための指導力」「保健主事登用に伴う企画力、実行力、調整能力」など具体的な場面に対する能力が挙げられている。³⁾

そこで本研究では、5日間の臨床看護実習における養護教諭に必要な能力に関わる学習の程度を明らかにする目的で臨床看護実習指導者（以下指導者と称す）と養護実習及び臨床看護実習を終了した学生に質問紙による調査を行い今後の実習支援の方向性を検討した。

II. 調査の対象と方法

1. 調査対象

臨床側は、平成19年度と20年度の臨床看護実習の実習先で過去に2回以上K短大の臨床看護実習

を受け入れたことのある24の病院やクリニックの指導者である。学生は平成19年度の臨床看護実習を終了した35人のうち調査当日提出した31人と平成20年度の臨床看護実習を終了した26人計57人である。但しK短大の臨床看護実習は、2年次の8月下旬に行われるため、学生は6月に3週間の養護実習を終了して臨床看護実習に臨んでいる。

2. 調査方法

指導者には研究目的、方法、倫理的配慮を明記の上、無記名、自記筆郵送法により依頼し、100%の回収と有効回答が得られた。学生にも不利益を被らない旨説明し同意を得て、2学年とも無記名の集合調査を行った。

調査内容は、調査1としてK短大の臨床看護実習実施要項から、実習目標とする看護能力(知識、技術、態度)の3項目について、前述の保健体育審議会答申にみる養護教諭に必要な能力のキーワードを中心に15項目の質問(表1)と最後に自由記述欄を設けた。15項目の質問は、養護と看護はその実践と行動において同質である。⁴⁾という考えから養護教諭に必要な能力と臨床看護実習の内容の共通事項を整理したものである。但し臨床看護実習では、知識・技術・態度を総合的に学習するため、養護教諭に必要な能力の1つを複数の実習項目から学習する場合もある。

調査2については、学生のみでの調査で“養護教諭をめざす学生として臨床看護実習がどのように役立つか”について4項目の選択肢にその他の項目を設けた。選択肢は「養護教諭のための保健医療・福祉系施設における実習の目的」⁵⁾から医療系を参考にしたものである。

調査1の集計は十分学習できる(5点)学習できる(4点)やや学習できる(3点)どちらとも言えない(2点)学習できない(1点)の5件法で平均値を算出した。分析については²検定を行い統計的有意水準は5%未満とし、使用したソフトはSPSS Ver 13.0である。調査2は単純集計を用いた。

表1 調査1 臨床看護実習に関するアンケート

実習	質問(実習)項目	養護教諭に必要な能力のキーワード
知識	1 実習する診療科に関する知識理解	知識・理解
	2 患者さんの訴えや症状に関する知識理解	
	3 必要な看護支援についての知識理解	
	4 検査や、他部門からの情報収集能力	情報収集能力
	5 日常生活上の注意や指導(食事・睡眠等)	指導力
技術	6 問診や観察の仕方、受けとめ方	観察の仕方
	7 観察や訴えを受けとめ判断し、対応する力	受けとめ方
	8 看護支援の技術(対応し実施する能力)	判断力
	9 記録の仕方や報告の仕方	対応力
	10 コミュニケーション能力及び技術(対応の仕方)	
態度	11 専門職としての力量(ニーズを捉える力、責任感)	力量
	12 チームワーク(連携・調整)のあり方(申し送り等)	調整能力
	13 向上心、意欲、積極性(カンファレンス、勉強会への参加)	
	14 計画を立てて実行する(実習計画等)	企画力、実行力
	15 患者さんの気持ちを理解しようとする態度(受け止め方)	

Ⅲ. 結果及び考察

1. 調査 1

表 2 は臨床看護実習について、指導者と学生の学習程度の平均値について、²検定した結果である。

表 2 調査 1 臨床看護実習に関するアンケート結果

質問項目	指導者 n = 24	学生 n = 57	² 検定
1	3.13	3.54	
2	3.21	3.70	
3	3.17	3.82	
4	2.96	3.21	
5	2.92	3.40	
6	3.67	4.39	
7	3.00	3.56	
8	3.33	4.12	
9	3.13	3.54	
10	3.50	4.16	
11	3.29	3.95	
12	3.38	4.11	
13	2.83	2.30	
14	3.13	3.49	
15	3.79	4.32	

$p < 0.05$

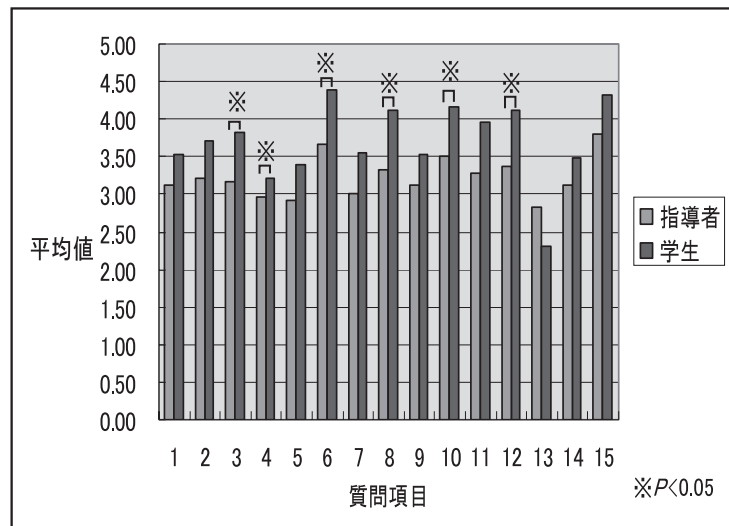


図 1 調査 1 の結果比較

表 2 より、指導者、学生共に「学習できない」とする 2.0 未満の平均値は算出されなかった。13 向上心、意欲、積極性を除いた全ての項目で指導者より学生の平均値がやや高く、中でも 3 看護支援についての知識理解、4 情報収集能力、6 観察の仕方・受け止め方、8 看護支援の技術、10 コミュニケーション能力、12 連携・調整能力については学生の平均値が有意に高値であった。また両者のそれぞれの項目についての平均値は大変類似した傾向を示しており、これは学生の回答が実践に基づいていることを意味しているものと考えられる。(図 1)

知識理解については自分の勉強不足を挙げる者が 20% いたが、「指導者の説明で十分理解できた」等の記述があり、臨床での指導の全てを学習と促えていた。特に 3 看護支援についての知識理解は有意差が認められ、臨床での学習効果の高さが感じられる。4 情報収集能力、5 指導力について、指導者の結果は、2.96 と 2.92 でやや学習できるに近いが学生は 3.0 以上であり、4 情報収集能力には有意差が認められる。しかし学生の平均値も決して高い値ではない。養護教諭の職務内容⁶⁾として最初に挙げられるのが学校保健情報の把握に関することであり、次に保健指導・保健学習に関することである。従って情報収集能力や指導力をより効果的に経験させるための指導法を検討する必要があると思われる。

6 観察の仕方や受け止め方、8 看護支援の技術、10 コミュニケーション能力の平均値が指導者、学生ともに 3.0 以上で、同時に有意差においても学生が高値であった。バイタルサインの測定や、

看護支援の実施、ベッドサイドでの患者さんとの会話は、直接手応えのある活動であるため、指導者の見解以上に学生には満足感が得られたものと推察される。また学校とは異なる実習環境の中で最も学内実習が生かされ、学生が意欲を持って取り組むことのできる実習内容でもある。

臨床実習のあとに養護実習を行った佐藤⁷⁾らの調査では養護実習で役に立った臨床実習の内容として、学生は医療・看護の実際をあげている。また津村¹⁾は、臨床実習で得た知識・技術は養護教諭として健康問題に関わる場合、とりわけ個別指導の必要な児童生徒の対応において、活用できるものであるとしている。従って、観察の仕方や受け止め方、看護支援技術、コミュニケーション能力は保健室来室者への対応をはじめ子どもに関わる日々の養護活動に直接関係する能力であるため、臨床看護実習における学習の程度がやや高いことが判明したのは、大変望ましいことである。

養護教諭は学校内で児童・生徒の健康を専門的に扱う唯一の教員であり、養護の専門職として学校保健に関しリーダーシップをとっていかなければならない。³⁾従って専門性を高め、責任感、実践力、指導力等専門職としてのあり方(態度)も要求される。

臨床で患者のニーズを捉える力は心身の健康問題を捉える力量形成に繋がり、臨床看護実習はこれらを指導者に学ぶことで専門職としての態度を学ぶ機会となる。責任感や社会性を備えた職業人としての自己のあり方に気づき、将来像を描く上で成果が期待できると思われるが、その学習程度は学生の11専門職としての力量の平均値が示すところである。

12連携、調整能力については、学生の平均値が有意に高値であった。養護教諭は、校内での連携をはじめ、専門医、保護者、専門のカウンセラー等との連携があって養護の職務が成り立っている。⁸⁾学生は既に養護実習を終えているためその大切さは認識しているものの、病院ではチームワークの中の連携(申し送り等)や患者や家族と関わり、必要な調整の役割は毎日繰り返し行われるため重要性を実感として受け止めたものと思われる。連携や調整能力は養護教諭のコーディネーターとしての役割を実践する上で必要である。

13向上心、意欲、積極性は、カンファレンスや勉強会、医師や看護師に質問して積極的に学ぼうとする態度のことで養護教諭に必要な能力の基本である。指導者、学生共に平均値が3.0未満であり、特にこの項目のみ有意差はないが指導者の平均値より学生の方が低い。学生の中には意欲はあっても勉強不足のため自信がなく積極的に行動できなかったものと思われる。短期間の実習で実習効果を得ようとするなら、意欲を持って自ら学ぶ姿勢がより重要である。従って、K短大では事前に、向上心や意欲、積極性を培うための手だてが必要と考える。そのためには、指導者の記述にも事前学習の不足が指摘されていたが、実習前に基礎的な学習を一層強化する必要が示唆された。

14企画力、実行力についても同様なことが言える。保健主事と共に学校保健安全計画を立て、実施していく力や、保健室経営、保健指導等のP.D.C.A.(計画、実施、評価、改善)に関わる能力のことである。学生は自分で実習計画を立てその基本を学んでいくが指導者の記述に「積極性・目的や目標が明確であれば計画は必然的に立つ」等の記述があり、学生の目的意識の低さや実習の意義が十分認識されていない状況が感じられた。しかし、15患者の気持ちを理解しようとする態度は、コミュニケーション能力と共に学生の平均値が4.0以上である。来室する子どもの気持ちを理解する上でまた健康相談活動を実施する上で必要な能力であるが、臨床での学習が十分役に立つと解釈

される。

2. 調査2

図2は調査2の結果である。

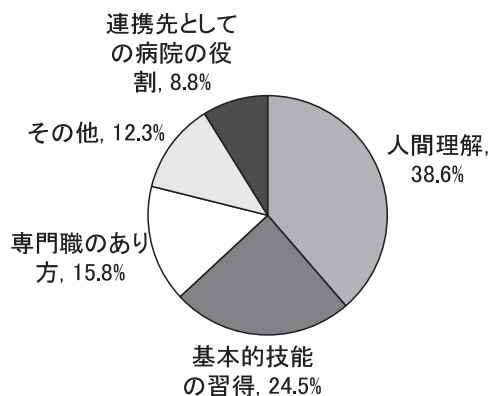


図2 養護教諭をめざす学生として「臨床看護実習」はどのように役立つか

K短大の学生にとって臨床看護実習は、養護や看護の対象である人間を理解する上で最も役に立ち、次が基本的技能の習得であった。養護教諭は子どもの一生を見据えて身体のみならず、心理的・精神的、社会的役割等トータルに理解することが重要となる。⁵⁾ そのため子どもだけでなく一生を通じた人間の発育発達及び様々な健康レベルを具体的場面で理解することができ、幅広く人間をみる視点に成果を上げることができたのではないと思われる。また多様化した発育発達課題、健康課題に対応するためにさらなる支援技術や能力を習得することが重要となる。実際の場合、参加、実習することにより知識や基礎技術を実践力として向上させることに臨床実習の意義があると考えられる。調査1の人間理解や基本的技能に関わる質問項目の10コミュニケーション能力、15患者さんの気持ちの理解、6観察の仕方・受け止め方、8看護支援の技術は、全て4.0以上であり意欲を持って取り組んだ様子が推察された。

専門職としてのあり方は、医療機関における業務の専門性を捉え、専門職業人としての医療看護に関わる指導者の姿に共感を得て学びの必要性を感じたものと考えられる。

連携先としての病院の役割については、連携先であることを意識して実習した者は少なかった。心身の健康管理を行う上で病院は欠かせない連携先であり、学校や養護教諭に対する期待や要望を知る上でまたとない機会である。知識や技術面だけでなく、特に連携先としての病院という視点での事前指導に力を入れると、学習が広がり、成果が得られるのではないかとということに気づかされた。今後の課題としたい。

その他は自己成長またはそれに類することを挙げていた。学外実習は社会経験である。学生は学外実習を終了する毎に成長するが、臨床看護実習もまた自己に気づき、自己成長の機会になっていることを確認した。

IV. まとめ

臨床看護実習における養護教諭に必要な能力に関わる学習の程度を明らかにし、今後の実習支援の方向性を検討する目的で、実習指導者と養護教諭を目指す学生に調査を行い分析した。

その結果、調査1より臨床看護実習で養護教諭に必要な能力は全て学習できることが明らかとなった。但し、能力によっては学習程度に差があり、支援が必要なものがあった。「看護支援についての知識理解」「情報収集能力」「観察の仕方、受け止め方」「看護支援の技術」「コミュニケーション能力」「連携・調整能力」等については、指導者が考える学習程度より学生の平均値が有意に高値であった。特に「観察の仕方、受け止め方」「看護支援の技術」「コミュニケーション能力」「連携・調整能力」に加え、有意差はないが「患者さんの気持ちを理解しようとする態度」は、4.0以上であり、学習の程度が高いことが明らかになった。

また「向上心、意欲、積極性」については、有意差はないが学生の平均値が指導者より低く、両者とも3.0未満であった。従って事前学習強化の必要性が示唆され、今後の実習支援の方向性が明らかとなった。

調査2より、養護教諭を目指すK短大の学生にとって臨床看護実習は人間理解の上で役に立ったことが第一に挙げられ、次いで基本的技能の習得であった。連携先としての病院の役割については役に立った実感が少なかったため、調査1の事前学習の強化と共に今後の実習支援の課題としたい。

調査1, 2の結果から臨床看護実習は養護教諭としての能力の育成に必要な実習であることを確認することができた。

謝辞

多忙な業務の中、学生指導を担当して頂いている実習病院の看護部皆様、今回調査に協力を頂きました指導者の皆様や学生の皆さんに心から感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 津村直子 養護教諭養成教育における小児病棟での臨床実習 学校保健研究 Vol44 2002 pp70
- 2) 永石喜代子他 養護教諭養成教育における「臨床実習」のあり方 学校保健研究 Vol49 No4 2007 pp368
- 3) 後藤ひとみ 養護教諭の専門性をふまえた養護教諭養成のあり方と将来への展望 日本養護教育学会誌 Vol 11 No1 2008 pp10~15
- 4) 津村直子・笹島由美 養護教諭に求められる小児看護 学校保健研究 Vol44 2002 pp67
- 5) 中桐佐智子・岡田加奈子編著 養護教諭のための保健医療・福祉系 実習ハンドブック 東山書房 pp10~15
- 6) 学校保健・安全実務研究会 編著 新訂版 学校保健実務必携 第一法規 pp1111~1114
- 7) 佐藤秀子他 養護教諭養成課程における臨床実習の意義 全国私立大学・短期大学(部) 養護教諭養成課程研究会誌 養成の歩み Vol8 No1 2008
- 8) 池本禎子・楠本久美子 短期大学における養護教諭養成の課題 日本養護教諭教育学会誌 Vol2 No1 1999

(2008年12月3日 受理)